バケツのこだまちゃん

和泉叢雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バケツのこだまちゃん

【Ｎコード】
Ｎ１０５０Ｎ

【作者名】
和泉叢雲

【あらすじ】
暑い夏、少年の前に突如として現れたのは、ナンセンスなバケツ少女だった。
これは約４カ月に及ぶ身も蓋もない掛け合いの記録である。

炎天下のナンセンス

私立山野学園高等学校1年C組33番の　長谷部（はせべ）ワタルとバケツ少女こだまの出会いは、市内の紅葉が秋の深みを演出し始めた11月7日現在よりさかのぼること、約4カ月前のことであった。

「ハーイ　トム。ハブ　ユー　フィニッシュド……」

7月14日、日曜日。こんな蒸し暑い日にさえ黙々と英文に向かわなくてはならないとは、なんという不条理か。

暗記、暗記、丸暗記。日々なんとなく高校へ通い、なんとなく授業へ出席し、なんとなく帰宅しているこの俺が、明日からの「期末テスト」などという複雑怪奇にして絶対主義的な審判を無事にやり過ごせる見込みはあるはずもなく、それゆえ俺はいわゆる「赤点スレスレ」という名の免罪符を手にすることに望みをかけ、今こうして起死回生の学習法を自らに課しているのである。

しくじれば補習、すなわち捕囚である。ちなみに捕囚というと歴史上はユダヤ人のバビロン捕囚であるが、この場合俺を幽閉するのはバビロニア王ではなく英語の担任であり、俺はユダヤ人ではなくただの生徒である。ただひとつ共通しているとすれば、それは俺に選択肢などないということだけである。

ところでこれは世界史の授業内容からの連想だが、あらゆる授業をろくに聴いていない俺がどうしてこの事項だけ正確に覚えているかというと、それはただ「バビロン」という音の響きが心地よかっ

たからである。クラスの中には語尾を活用して「バビル」とし、さらには「2世」という語を接続して固有名詞とする者がいるが、そうした変格活用の賛否について今は考察している余裕はないので、俺は自分の脳裏のド真ん中で「バビロン」と毛筆で書かれた木の板を握りしめながら鞭打たれて苦悶の表情を浮かべる半裸のバビル2世の首をひょいとつかみ、渾身の力で頭の片隅へと放り投げた。バビル氏は空中を約2回転半ひねりして虚空の彼方へと消えていった。こうしてまたひとつ、俺の脳裏に星が生まれたのであった。

ふと、くだらない妄想に浸っている自分に気づいた途端、部屋はさらに蒸し暑くなった。俺はついにたまりかねて勉強を中断し縁側へ向かった。

俺の部屋は2階の和室、家は古い木造、黒々とした2階建てである。ところどころガタが来ているため、隙間風がよく入る。良く言えば通気性に優れ空気が新鮮で、悪く言えば夏は暑く冬は寒い。それゆえエアコンを全開にしても、ちっとも効果が実感できず電気だけが無駄になってゆくのである。

このような住宅環境の下で我が家が伝統的に選択している夏の冷却法は、足を水に浸けることである。これはまことに古典的なやり方ではあるが、バケツにただ水を張るだけで結構な涼感が得られるので侮れない。必要とあらば氷を浮かべて冷却力をさらに向上させることもできる。さらに冬にはお湯を張ることで暖をとることすらできる。これぞ実用性とエコロジーを両立した、まさに今世紀を代表するにふさわしい手法である――と4歳年上の兄は熱弁するが、おおむね同意である。ただし兄は体重が0．13トンすなわち130キログラムのまことに肉感的な男性で、また年間を通じて一日のほとんどを1階の自室で過ごす生態の陸生生物である。だからこそ自身の体温調節の重要性を認識したうえで熱弁をふるうのであろう。

いわく、
「いいかよく見ろ。今、俺の体は”はやぶさ”だ。こうして足をバケツに浸すと”おかえりなさい”だ。分かったな。擬人化よろ」
親指を立てる。眼鏡が光る。豊満な肉体。もはや何を言いたいのかさっぱり分からない。

回想しているうちに縁側に着いた。炎天下にさらされた俺の額には早くも大粒の汗がにじんできた。さっそく庭の物置から青色のポリバケツを引きずり出し、緑色のホースから水を注ぎ込む。バケツが満たされるにつれて水音は低くなり、水面には空から照りつける太陽のまばゆい反射光が浮かび始める。水しぶきが心地よい。
水がちょうどいい量に達したので俺は蛇口を締め、バケツを持ちあげようと手をかけた。
「まーぷー。あなたはずぶ濡れ」
突然、頭上から水が降ってきた。
「わっ」
あまりの出来事に俺は叫び、ひっくり返った。浴びた水はバスタブ一杯ぶんほどあっただろう。俺はびしょ濡れになった。バケツはひっくり返ることなく直立している。その上には何かの輪郭が見える。が、水が目に入ってよく見えない。呆然とする頭で起きたことを確認しようと、額に貼りついたワカメ状の前髪をかき分けつつおそるおそる顔を近づける。
「じーっ」
目の前にジト目が現れた。
「うおぅ」
驚いた俺はさっきよりも増して情けない声をあげ、尻もちをついた。
「じーっ」

なんと水を張ったバケツには少女が立っていた。いや、兄にいわせれば幼女という方が近いのかもしれない。薄い水色のワンピース。そしてジト目である。

「じーっ」

バケツに生えた幼女は直立不動。やはりジト目である。いわゆるガン見。視線が痛い。俺は子供の扱いが大の苦手だ。気まずいぞ。この気まずい空気を打破するために俺は何か言わなくてはならない。そう、異文化コミュニケーションの第一歩はあいさつだ。さわやかなあいさつだ。

「や、やぁ」

「じーっ」

「今日は、暑い、ね」

「じーっ」

「そのバケツ、涼しい？」

「まーぷー」

「ぎゃーっ」

俺はびしょ濡れ。再びワカメ化した前髪をかきわける。やはり少女、バケツ、そしてジト目である。俺は子供の扱いが大の苦手だ。大事なことなので2回言った。決して言い訳などではない。

「――こだま」

淡々とした響き。声の主は少女だった。どうやら機嫌が悪いとみえる。

「わたし、こだま」

ついに喋ったぞ。自己紹介か、そうかそうか。言葉が通じると分かった途端、視線が痛くなくなった。へし折れていた俺の自尊心がみるみるその形を取り戻していく。そうだ相手は子供だ。怖がらせてはいけないから優しく優しく。

「えっと……こだまちゃんは、そこで何してるの？」

「こだまをここに引きこんだのはあなた？」

俺のまっとうな質問は少女の理不尽な質問で返された。まるで俺

が悪いとでも言いたげだ。びしょ濡れの俺は少しムキになった。
「いや、呼んだというか、君がいきなりそこから出てきたんだろう」
「出てきたって――あぁ、そういうこと」
「どういうことだよ」
「わたしが落ちた穴はこのバケツにつながっていたのね」
「意味がわからん」
「並行宇宙。時空の歪み。でももう穴はふさがっちゃったみたいね」
少女が淡々と語るそれは、どう考えても普通の子供の言い分ではない。これが噂に聞く“電波”か。おまけに声と口調が不釣り合いだ。か細い声に似つかわしくない高圧的な口調。なにひとつ納得できない俺はいらだった。
「なんの話だ。すると君は宇宙人とでも言うか」
「少し違うわ。正確には隣の宇宙にある、ここと は別の世界の人間ってとこかしら」
「はぁ？　そんなことってありうるのか」
「だって実際にわたしはバケツから突如あなたの目の前に現れて、まーぷーと水を浴びせたじゃないの」
「張本人が言うな！　っていうかあの水はやっぱり君が出したものだったのか」
「まーぷーは水の呪文なの。選択した対象に大量の水を浴びせることができるのよ。原理を説明すると長くなるから省略するけど」
「どうでもいい！　だがいきなり人に水を浴びせるなんてどうなんだよ」
「正当防衛よ」
「俺が何をした」
「いち、頭から水をかけた」
「水の入ったバケツの底から出てきたら濡れるに決まってるだろうが！」

いや、自分でも言ってることの意味が分からないが！
「に、この真夏の炎天下に突如現れた少女に対し、ちっとも気の効かないあいさつをした」
「ぐはっ」
待てよ。今どうして俺は絶句したのだ。不条理だ。しつこいようだが俺は子供の扱いが大の苦手なのだ。そもそも俺は被害者だぞ。だが初対面の人に悪い印象を与えてしまったのは、たしかに良くないことだ。あぁ、入学式以来の人間関係の失敗が脳裏をよぎる。自分の内面との葛藤に悶絶した俺は両手で頭を抱えてうなだれた。
「あなた楽しい？　そうやってて」
「お前がやらせてるんだろうが！」
ここ2日間ひたすら英文を読んでいたせいか、今日の俺はいつもよりリアクションが大きい。この場面を外国人に見せて「ディスイズ　ジャパニーズ　ツッコミィーッ」などと解説しても難なく通じそうなほどの勢いだ。
「それにしてもあなた、よく喋るのね。さっきとは大違い」
「いやそれはこっちのセリフだから！」
「わたし、シャイでデリケートなの」
そしてこのジト目である。
どうやら俺はトンデモナイ存在に遭遇してしまったようだ。ガキの頃によく見た映画に「未知との遭遇」があるが、俺が子供心にあこがれた未知との遭遇はこんな不条理きわまりないものではなかったはずだ。悔しくなった俺はさっきの質問をそのままそっくり返してやることにした。
「じゃぁ逆に聞くが、宇宙人さん。あなたはそうやってバケツに足を突っ込み直立してて楽しいんですか」
「別に」
普通に返された！
「いえ、涼しいわ。でもずっとこうしているのもどうかと思うわ。それとわたしは宇宙人ではなくて並行宇宙上の――」

「そうかい、じゃぁまたバケツの底に穴でも開けて隣の宇宙とやらに帰ればいいだろう」
と、俺は相変わらず淡々と語る少女の言葉に割り込んで言い返した。
「それが出来ないからこうして立っているんじゃない。ところであなたは暑くないの、そうしてて。あぁそうね、さっきわたしがまーぷーしたから暑くはなさそうね」
「あのなぁ……」
もはや返す言葉が出てこない。蝉の音が耳を覆うばかりだ。真夏の炎天下で俺は一体何をしているのだ。あぁいつまでもこうしているわけにもいかない。
「……とりあえずそのバケツから出たらどうだ」
「そうね。履物を取って頂戴。素足が汚れるのはいや」
「それでずっと立っていたのか」
「わたし、綺麗好きなの」
そしてこのジト目である。らちが明かないのでしぶしぶ俺は雨戸の下に並べてあるはずのサンダルを探す。が、どうやら親が場所を移したらしく見つからない。
「もういいわ。こっちへ来て手を貸してちょうだい」
少女が手招きする。俺は再びバケツのそばへ戻った。
「ひとつ聞いていいかしら」
「なんだよ」
「あなたの名前は」
この期に及んで今度は俺への事情聴取のでも始めるつもりだろうか。
「そんなことか。長谷部ワタル」
と、俺は言った。なぜかは分からないが、自分のフルネームを音読するのは照れくさい。
「ハセベワタル……」
と、少女は口元で一度、反復した。

「ワタル」
呼ばれた。
「なん――ぐがぉ」

返事をしようとした俺の目に突如飛び込んできたのは少女の足だった。鼻に軽い鈍痛と皮膚の感触を感じると同時に、衝撃が顔面を伝う。目を上げれば逆光で黒い影になった少女。その髪を陽光になびかせて頭上を軽やかに通過する姿が、スローモーションで展開してゆく。同時に俺も仰向けに倒れてゆく。空は青く、雲は白い。そんな景色を背景に滞空する少女の姿は、まるで鳥だ。かすかにワンピースの中が見えた。

どたっといって俺は仰向けに倒れ、すたっといって少女は縁側に着地した。俺の目には天地が反転した我が家が映った。あろうことか少女はバケツから跳躍し、自分より背の高い俺の顔を踏んで縁側にダイブしたのだ。俺の兄なら間違いなくこう言っただろう。

「俺を踏み台にした！？」、と。

なぜなら兄はそういう奴だからだ。それはともかくとして、少女があのきゃしゃな身体で、たとえ俺を経由したとはいえ１０ｍ以上の距離を跳躍したというのは驚異的なことだ。

「なにすんだよ！」

文字通り足蹴にされた俺は、自分が怒るべきか喜ぶべきか分からない感覚に駆られながらも、少女の背中に向けて言い放った。

「その少女っていうのやめてくれないかしら。わたしの名前は伝えたはずよ、ハセベワタルくん。少女はダメ、もちろん幼女もガールもチビッコもダメ。わたしはこだま。」

依然として俺に背を向けたまま髪を直している。というかなぜ少女と呼んでいることが分かったのだ。

「こだまだかのぞみだかひかりだか知らないが、人の顔を踏むのはどうなんだよ」
「お姫様だっこのほうがよかったかしら。あとその例え方はちょっと古いんじゃないかしら」
「いや、そういうことじゃなくてだな、お譲ちゃん」
「“こだま”」
と、言って俺の方に向き直る。
「だからそういう問題じゃ」
「まーぷ…」
「ああ、ああ、“こだま”！！こだまちゃん！！」
俺は慌てて立ちあがり頭上を仰いだ。またあの水を浴びせられてはひとたまりもない。このとき俺と少女、つまりこだまの身長はちょうど同じくらいになった。逆算すれば縁側の高さ分だけこだまは俺より背が低いことになる。まったくもって面倒なガキだ。
「ほらね、簡単でしょう。でもガキはいただけないわ。お譲ちゃんもダメ。ジャリンコなんて古すぎてまーぷーものよ。」
「あのなぁ」
ますます何をどう突っ込んでよいのか分からない。
「何でもいいが人の顔を踏むのは——」
「でも見たんでしょう」
蘇るジャンプの光景。白い脚線と薄水色のワンピース。だが肝心の中身は黒く霞んで思い出せない。ええい誰の仕業だ！　俺はたしかに見た。見たはずだぞ。む、見たのか？　たしかに見たと思うのだが。あれ…見たのだろうか。いや、見てなかったようにも思える。うむ、おそらく見ていない。そうだそうに違いない。なぜかそう思わなくては話が進まない気がした。うむ、俺は何も見ていないぞ。
「や、や、や、ややや！　セーフセーフ！！」
「まぁ、見えていても見えてなくても、イチゴだとしても水玉だとしても同じことだけど」
「意味がわからん！」

「ふ　ふ　ふ　ふ　ふ」
悪魔か！魔女か！この少女は！
「まーぷ…」
「ひぃぃ！　なぜ分かった！」
「わたし、短気なの」
「答えになってないからそれ！」
そしてこのジト目である。ふっ、とこだまは元の目つきに戻り俺の後ろに目をやった。
「そうそう、そのバケツも持ってきてちょうだい。方法はわからないけれど、おそらく帰るために必要なものだから」
振り向けば因縁の青いポリバケツ。
「このバケツがか？　ってか俺をからかいに来ただけならさっさとこのバケツを使って帰れ！」
と、言って俺は駆け足でそのバケツを拾い上げ、こだまの前にぐっと差し出した。こだまはそれを受け取ると、おもむろにそれを頭からかぶった。
「にあうかしら」
「ふっざっけんなっ！」

（続）

炎天下のナンセンス（後書き）

この第1話は、先週ひらめいたアイディアを思いつきに任せて2日で一気に書きなぐったものです。これで終わりでもよかったのですが、せっかくなのでもう少し続けていこうと思います。

わりと脳内に映像をイメージして作るので、文体とか語尾とかその他表現を過去形現在形混ぜてあれこれいじってたりしますが、僕なりの仕様だと思ってください。音読するとシーンとかカットがイメージできるかもしれません。

それでは、次回もお楽しみに。

※ルビは加減が分からないので入れませんでした。もし極端に読みづらかった漢字があるようでしたらお知らせくださいませ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1050n/

バケツのこだまちゃん

2010年10月15日22時00分発行